

題目：

イヌにおける第三者の社会的評価-イヌはヒト間のやりとりから何を読み取り、好むのか？-

氏名： 小原嵐

指導教員： 瀧本彩加

第三者の社会的評価とは、直接経験からではなく、間接的に観察して得た情報をもとに他者を評価することを意味する (Anderson et al., 2017)。この第三者の社会的評価は、ヒトや霊長類に限らず、イヌにも見られる。イヌはヒトの社会的シグナルに敏感に反応し、その意味を理解する高い社会的認知能力を持っている。イヌは、第三者同士の自身の利害に関係のないやりとりを観察し、ネガティブな第三者の社会的評価をするだけでなく、ヒト以外の霊長類では学習訓練なしに見られなかったポジティブな第三者の社会的評価までもが見られることが報告されている (Freidin et al., 2013; Marshall-Pescini et al., 2011)。しかし、先行研究ではイヌが観察した第三者同士のやりとりで餌が用いられていた。そのため、イヌは第三者の行動を評価したのではなく、自身の餌に対する選好を反映させただけである可能性が考えられる。そこで本研究では、叱る人をなだめるかどうかを操作した日常的な場面を設定し、Chijiwa et al.(2015) の手続きを参考に、イヌにおけるポジティブな第三者の社会的評価を実験的に検討した。具体的には、イヌに、叱る人と叱られる人のやりとりに第三者（介入者）が介入して叱る人をなだめる場面（なだめる条件）、叱る人をなだめない面（なだめない条件）のいずれかを見せた。観察終了後、介入者とニュートラルな人が餌の入った容器をイヌに呈示し、イヌに選択をさせた。選択場面におけるイヌの選択・イヌが介入者を注視する時間・イヌが介入者の近くに滞在する時間を測定した。イヌはなだめない条件よりもなだめる条件で介入者をより多く選択し、長く見て、その近くに長く滞在すると予測した。介入場面で介入者がなだめた行為とその後の選択場面でのイヌの選択を検討するため、カイ二乗検定を用いて分析したところ、有意な連関は見られなかった。つまり、なだめた行為はイヌの選択に関連しなかった。また、介入者が叱る人をなだめる条件となだめない条件でイヌの介入者に対する注視時間に差があるか対応のない t 検定、マンホイットニーの U 検定を用いて分析したところ、有意差は見られなかった。さらに、介入者が叱る人をなだめる条件となだめない条件でイヌの介入者の近くに滞在する時間に差があるか対応のない t 検定を用いて分析したところ、有意差は見られなかった。したがって、本研究ではイヌにおけるポジティブな第三者の社会的評価を確認することができなかった。しかし、問題点を改善した手続きを用い、参加個体数を増やして、引き続き、イヌにおけるポジティブな第三者の社会的評価が見られるかを検討していきたい。